思い草
國學院大學人間開発学部教育実践総合センターだより
第23号
平成29（2017）年6月28日　発行

## 教室の中に教育の本質を見出す意味

人間開発学部長　田沼（たぬま）　茂紀（しげき）

ずいぶんと前の話である。学校現場に身を置いていた若い当時、私が愛読していた書籍が２冊あった。１冊は、群馬県佐波郡島小学校長として教師集団を牽引した斎藤喜博先生編の『授業の創造』（1963年）である。そしてもう１冊は、兵庫県内丹波地方の学校で多年教鞭を執られた東井義雄先生が晩年に著した『いのちの根を育てる学力』（1982年）である。戦後教育の中で教師が眩しく輝いていた昭和30年代、教師が自らの主体性をあまり制約されずに活躍できた時代に両先生は目の前の子どもたちと真っ直ぐに向き合って数々の教育実践を展開された。その生き様は「東の斎藤、西の東井」と高く評価され、その教育信念と日々の実践に心惹かれて教壇に立つことを志した者も少なくない。今では書籍でしか知り得ない教育実践家の生き様、そのKey Wordは「教室」にあった。齋藤先生は「授業」を学校教育の中核に据え、子どもも教師も授業を通して自らの可能性を無限に拡大できるという実践を積み重ねられた。一方、東井先生は具体を介してしか普遍は語られず、その普遍は希望と結び付けないと意味を持たないと教育実践の本質を提唱された。

私ども教員養成に携わる者、将来教職を志す者は「学校教育の本質」をどこで学べばよいのであろうか。言わずもがなことである。学校の教室に足を運び、教室の教師と子ども、子どもと子どもが織りなす「授業」を介してしか学べないのである。東井義雄先生は、「自転車のタイヤを支える道はばは三センチもあれば足りるだろう。しかし、実際には、三センチの道はばでは自転車は通れない。直接役に立つところだけが有用であるのではない。何の役割りも果たしていないように見えるところが、案外大切なはたらきをしてくれているのである」という名言を残している。教師を育てる、教職を志す、ともに噛み締めたい言葉である。

## 原点をみつめる

教育実践総合センター長　成田（なりた）　信子（のぶこ）

教育実践総合センターは、國學院大學人間開発学部創設と共に立ち上がり、29年度で９年目を迎えました。大学の一学部がセンターをもっていることは実に恵まれたことです。これまでの諸事業によって得たことを振り返り、今後を展望したいと思います。

センターの機能には、大きく分けて二つの側面があります。一つは学校や教育者、地域の声に応え、教育実践の発展に寄与しようとする側面です。もう一つは教職をめざす学生の臨床的な学びを支援する側面です。この二つは車の両輪のようにかかわっています。

具体的にセンターの事業を挙げて車の両輪がどのように働いているかを考えてみます。「教育インターンシップ」という科目があります。学部創設時から地域の学校の協力を得て学生を派遣し、大学の授業科目として単位を出しています。学生が学校現場に出かけて、学校におけるさまざまな教育活動に従事し、その振り返りを通して自らの力量を形成していく科目です。学生は、子どもを見る眼を培い、子どもへの働きかけを学び、先生方の動きを身をもって感じることができます。学校は、教育をめざす次世代の若者を育てることに貢献しながら、教育活動に必要な支援の補助人員を得ることができます。多くの学校の協力によって成り立つ科目ですが、今般の国の教職課程カリキュラム改訂で教育インターンシップが教育実習の単位として認められることになることを考えると、先行的な実践といっていいと思います。

センターがかかわる事業は、夏季教育講座、共育フェスティバル等数多くありますが、今後はこれまで実現してきた二つの側面を生かしながら、さらに教育実践の発展に資する方向をめざしたいと考えます。

# 教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

## 教　育　実　習

### 教育実習での出会いを胸に

人間開発学部教授　高橋　幸子

「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは」兵十は、火縄銃をばたりと取り落としました。―ご存知、「ごんぎつね」の最後の場面（一部略）です。教育実習の研究授業でこの部分に取り組んだ時のことは数十年を経た今でも鮮明に憶えています。子どもたちの真剣なまなざし。発言の声。表情。私は通信教育による免許取得であったため、教育実習は2月でした。年度末の締めくくりの時期、しかも「ごんぎつね」という大切な単元をよく実習生に任せてくださったと、思い出すたびに感謝と同時に申し訳なさでいっぱいになります。

巡回で実習校に伺うと、それまで担任の先生が築かれた土台がみえます。児童生徒の能動性、学習のルール、お互いを尊重する姿勢、ことばのやりとり、ノート、掲示物など、学級経営を基盤に授業が成り立つ条件がすでに整えられています。その上で、研究授業をさせていただく有難さを数十年前の我が身に重ね合わせて感じています。

教育実習での出会いが、その後の人生を左右することもあるでしょう。私は実習中、算数の学習に苦戦している児童に個別の支援を行う機会がありました。実習終了日にもらった手紙にはたどたどしい字で「先生のおかげでかけ算がわかるようになりました。ありがとう。」とありました。特別支援教育に進むひとつの契機となったことはいうまでもありません。

教育実習の受け入れは学校現場にとって負担でないはずはありません。児童にとっても然りです。貴重な時間を割き、大切な児童を委ねて、それでも受け入れてくださるのは次代を担う教師を育てるという強い使命感に他ならないでしょう。

教育実習で出会った子どもたちの笑顔、教職員の皆様方からの励ましを心に刻んで、「学び続ける教師」として歩んでいくことが最大の恩返しと肝に銘じていきたいものです。

### 教育実習を終えて

初等教育学科　３年　工藤　駿

私は４週間の教育実習の中で、先生方からいただいたたくさんのご指導や子どもたちとの関わり合いを通して、「課題」と「やりがい」を見つけた。

課題の１点目は、「子どもを知る」ということである。やはり、子どもにはそれぞれ個性があり、得意なことや苦手なことが全く違う。また、優しい子もいれば、言葉が少しきつくなってしまう子もいる。私の担当教諭だった先生は「頭が切れるのはAさん、優しいのはBさん、Cさんは勉強はできるけど言葉がきついから友達関係が心配」などとクラスの子どもを熟知していて、それを指導につなげている場面が見られた。教師はどうすれば子どもが伸びるのか、成長していけるのかを考えて、そのアシストをすることが仕事になると考えられるので、子どもに指導する前段階として「子どもを知る」ということは注意深く、正確に行う必要があると学んだ。

２点目は、「子ども主体の授業を行う」ということである。「アクティブラーニング」や「主体的・対話的な深い学び」という言葉自体は大学からも言われていたが、実習を行ったことにより、その難しさを感じた。私の授業は一問一答形式になってしまうことが多く、教師主導の授業であり、クラス全員の意見を取り込んで進めるということができていなかった。重要な言葉などは教師が言うのではなく、子どもから出させるということをより意識する必要があると学んだと同時に、発問に工夫をしなければならないと感じた。

様々なことを学んだ４週間で、私の心の支えになったのは子どもたちだった。授業中の真剣なまなざしや休み時間中のキラキラした笑顔。子どもたちとの関わり合いはとても楽しく充実した時間だった。

さらに運動会にも参加させていただき、みんなで力を合わせて必死に取り組み、どんどん成長していく子どもたちの姿を見ることができた。

子どもと関わり、子どもの成長を間近で見られる。そんなやりがいのある教師という職に就きたいと改めて強く思わせてくれた実習だった。

# 教育インターンシップ　今年も「実践体験型実習」をテーマに学びます

## 教育インターンシップを経験して

子ども支援学科　２年　加藤奈緒子

私は保育園で１日８時間保育に参加させていただいている。私自身これがほとんど初めての子どもたちとの触れ合いなので、予想外の子どもたちの行動に戸惑うこともあるが、とても楽しく活動させていただいている。

０歳から順に学年を上がらせていただいているので、１年間でできるようになることが目に見えてわかり、年齢ごとの発達を学ぶことができている。また、私は幼稚園だったため経験したことのない１日の流れを経験することで、幼稚園と保育園の違いを身をもって体験することができた。

授業で学んだことを頭ではわかっているつもりだが、実際その状況に立ってみると何もできないことも多く、落ち込むことも沢山ある。しかし、せっかく実習前にこのような機会をいただいたので、実習時には今回できなかったことが少しでもできるよう、子どもたちへの個々に合わせた声のかけ方、遊びの展開の仕方に注目して残りの時間を過ごしたいと考えている。

## 子どもの「気付き」を作る援助

子ども支援学科　２年　西村 遥香

私は現在、週に１度、幼稚園で教育インターンシップを行っている。クラスは固定ではないため、様々なクラスを見る予定だが、現段階では3歳児クラスで活動させていただいている。この中で、私は「保育者の援助」について色々と考える機会があった。

絵具を使い、好きなように表現する時間があった。先生からは絵具で好きなように活動していいと説明があった。子ども達は最初、置いてあった筆で絵を描いていた。私は、もっと表現を広げてほしいと思い、「先生は手に塗っちゃおう!!どうなるかな?」と言いながら手に絵具を塗り、スタンプしてみせた。そうすると、みんなが手や足に塗り始めて様々な形の模様を楽しんでいた。中には、肘や膝に塗って「これ、どうなるの?」と言いながら自主的に形を作る子がいた。絵具の感触を楽しむ子も出てきた。

今回の出来事で、子どもの主体性を大事にした援助が必要だが、保育者が率先して行うことで子どもの主体性を引き出せる援助も重要だと感じた。

これからも、子ども達が楽しく様々な経験ができるような援助方法を考えていきたいと思う。

## 教育インターンシップ

初等教育学科　３年　丸山 らん

私は、現在、母校である横浜市の小学校で週に一度教育インターンシップを行っています。毎回、先生方のご指導や子どもたちとのかかわりの中から貴重な経験をさせていただき、多くのことを学ばせていただいています。

先日は、4年生の宿泊体験学習に引率させていただきました。４年生にとっては初めての体験学習でしたが、自分たちで計画的に行動したり仲間と協力して活動したりしながら一つ一つの課題を成し遂げていく様子が見られ、子どもたちが秘めている可能性の素晴らしさを感じました。また、「筏体験」で困った場面では、先生方の子どもたちの可能性を引き出す言葉かけにより子どもたちが問題解決していく姿を見ることができました。児童理解を根底に子どもに考えさせながらその子の将来を想って一人一人に合わせた言葉かけをする重要性を実感しました。

この経験から得た学びをこれからの活動に生かしながら、理想の教師に近づくことができるよう日々努めていきたいと思います。

## 教育インターンシップを経験して感じたこと

健康体育学科　２年　玉置 善弘

今回、インターンシップで、横浜市立青葉台中学校に行かせていただいています。主に個別支援学級を見せていただいて、感じたことが多くあります。特に、印象に残っているのが、生徒に対しての注意の仕方です。普通学級と異なり、個別支援学級では緘黙の障害で話せない生徒や、落ち着きがなく、すぐ騒いでしまう知的障害の生徒など、様々な生徒がいます。そこでは、「何をやったらダメなのか」「社会的モラル」というようなことに関して、「それはダメだ」「やめなさい」という注意ではなく、「～だからダメだ」「～しているからやめなさい」または、なぜその行為がダメなのか考えさせる指導が丁寧になされていました。

個別支援学級での教育の仕方、接し方などは、なかなか学べることではなく、とても貴重な経験となっています。今後のインターンシップではもっと生徒と接して、多くの学びを見つけていきたいです。

# 未 来 塾 「人間開発は人づくり」をモットーに！

教育実践総合センターでは、学生のみなさんの様々な学びを応援するために、人間開発学部の先生方による自主講座『未来塾』を開講します。自分の課題に応じて講座を選択し、積極的に受講することができます。

## 「未来塾」で育むもの

人間開発学部教授　髙山 真琴

教育実践総合センターでは、学生支援領域事業として「未来塾」を実施しています。

「未来塾」は、将来にわたって求められる教育者や指導者としての基礎的な力や実践的指導力等を形成することはもとより、学ぶ楽しさの体験や基礎的知識・スキル獲得を通して、教員として担保すべき資質・能力を育てることを目的に、大学のカリキュラムの中では収めきれない様々な内容を、人間開発学部の専任教員がそれぞれの専門性を活かし、自由な形式で講座を開講しています。

過去から現在に至るまでには「わかる！できる！！国語授業づくり講座」、「ピアノ講座」、「小学生が学ぶ〈プログラミング〉を体験しよう」、「柔道基礎力養成講座」、「体育、集団宿泊的行事としてのスキーを学ぶ講座」、「保育教材研究講座」、「子どもの遊び体験教室」などが開講されてきました。学生諸君には今後も大いに「未来塾」を活用し、知識や技能を身に付けるに留まらず、活用できる力をも育みながら、自身が描く将来像に近づいて欲しいと願っています。

## 平成29年度の予定をお知らせします

●7月25日(火)　15：30～
第1回教育インターンシップ連絡協議会

●8月5日(土)　13：00～
第９回夏季教育講座　音楽教育実践フォーラム
『音楽科における今日的課題』
～「鑑賞」「音楽づくり」「我が国の音楽」の
指導の充実に向けて～

●10月29日(日) 10：00～
共育フェスティバル
「輪―つながる輪、広がる輪、みんなの輪」

●12月26日(火) 15:30～
教育インターンシップ　報告会
第2回教育インターンシップ連絡協議会

## 平成29年度のスタッフを紹介します

◆教育実践総合センター

| | | |
|---|---|---|
| センター長 | 成田　信子 | |
| 副センター長 | 夏秋　英房 | |
| 担当 | 小笠原優子 | 銀杏　陽子 |
| | 唐沢はるみ | 塩谷　　香 |

國學院大學人間開発学部教育実践総合センター
〒225-0003　横浜市青葉区新石川3-22-1
電話：045-904-7711　fax：045-904-7709